東京ジャーミイ金曜日のホタバ

2007年9月14日

ラマダーン月

親愛なるムスリムの皆様。ラマダーン以外の１１の月において、人は精神的に汚れた状態になります。この汚れというものは、手や足の汚れとは全く異なるものです。手足の汚れは洗えばきれいになります。しかし精神的な汚れは洗っても落ちず、またその人の言葉や考えや感情をも汚します。汚れた状態の知性でクルアーンを読んでも、何を読んでいるのか理解されません。崇拝行為を行なってもその喜びは感じられません。ここで汚れているのが精神である以上、それを清める手段もまた精神的なものである必要があるのです。

崇拝行為は、人が清められるため、アッラーによって示されている手段です。人を創造されたお方は、その弱さを誰よりも、本人自身よりもご存知であられます。クルアーンでも述べられているように、ご自身が創造されたものをご存知でない、ということはありえないのです。ご存知であるからこそ、人の精神的な汚れやサビ付きを清める処方箋をも、そのお方が最もよい形で書かれるのです。啓示とは、そういった処方箋によって構成される神聖な癒しの源なのです。

親愛なるムスリムの皆様。崇拝行為はそれ自体が目的なのではありません。それらは、それを行なうことによって生じるより崇高な目的のための媒介なのです。それぞれの崇拝行為には目的と英知が存在します。しかしこの目的と英知は、時にはその中に神のメッセージが明らかに見出されることもあれば、熟考によってのみ見出されることもあります。例えば、断食という崇拝行為の目的は、このうちの前者でしょう。断食を命じるクルアーンの章句によって次のように述べられているのです。恐らくあなたがたは主を畏れるであろう。」 （雌牛章第**183**節）

親愛なるムスリムの皆様。弱まってしまった魂が力を得るためには、その飢えが癒されることが必要です。なぜなら１１ヶ月をとおして肉体に対して行なわれた投資は、魂や知性、意識を後回しにし、それらを弱めてしまったからです。しかし人を人たらしめるものは肉や骨ではありません。だから人を人たらしめる大切なものを補強し、高めなければならないのです。

最後の啓示は、マッカで、ヒラーの洞窟において、ラマダーン月のある晩、下されはじめたのです。私たち信者は、啓示が始まった月であることから、ラマダーン月を「月々の王」と見なします。ラマダーン月は、クルアーンの月であり、この月の神聖さは啓示によるものなのです。これが人々に与えるメッセージとは次のようなものでしょう。啓示は、それが下された月にこれほどの神聖さを与えているのなら、それが下された夜を１０００の月（８３年にあたります）よりも、人の一生の長さよりもなお尊いものとしているのなら、クルアーンの啓示があなたの胸に、あなたの生き方に下されたとすれば、あなたの価値はそれほど高められるでしょうか。

ラマダーン月はクルアーンと一体化する月であるべきです。クルアーンは、ただ手や舌にではなく、心や知性、そして何より私たちの生き方においても存在しているべきなのです。クルアーンが私たちの生において存在するためには、私たちの思い、考え、そして個性をクルアーンを基盤としてその上に形成するべきです。それ自体が既に尊いものであるクルアーンを、尊いものと高めようとするのではなくて、クルアーンが私たちを高めることができるよう、何かを行ないましょう。皆様のラマダーン月が祝福されたものとなりますように。私たちの赦しへの媒介となりますように。